

3 おっきなとうのふかいそこ

おっきなとうのふかいそこ

「ええ匂いやなあ　　とと、がまんがまん、や」

この世界の兄弟——かおるはんのドーナツ屋台からちよい離れて、わいは穴開いた。

肩にはフロシキに包んだ本がぎょうさん。ベリーはんも無茶しよなあ　　たいした量やないわー言うてたけど、このかわいい妖精さんの大きさ、ちちゅうもんも考えて欲しいわ。

「あら？ その風呂敷　タルト？」

うおっ！

びっくりして振り向いたら、クセのある明るい色の髪——パインはんや。ヤバ、とつとと行かな！

「あ、ちよ、ちよつとまつ　　」

声に追いかけれながら、わいは穴なか飛び込むさまに閉めたつた。　　ついてきとらん？　　ふう。

「ほんまはこないドタバタせんと、兄弟ンとこ寄っ

て行きたいけど、この姿やからなあ　　あん？ ええ匂いが、まだしとん？」

背負つてる背中が温うなつてきたわ。寄つてもおらんのに、いつの間にドーナツ入れたんやろな、兄弟　　ま、いつものことやけど。

「やれやれ。駄賃だちんもろたら、ため息つけへんなあ」
甘い匂いでなんとかフロシキ支えながら、わいは穴ン中の暗い道歩いてつた。

暗い道を歩いてくと、そのうち明るうなつてくる。けど、明るい色は世界でちやう。いままでおつたピーチはんたちとこはきれいな青の色、これから行くとこは　　お、ついたついた。

「この世界は、少し灰色っぱい青、やな」

同じやない、かあ。ひとの姿形は同じなりに、違うもんやなあ。

それにしても、や。

「なんど見ても、でかい塔やなあ。」

もうメビウスがおった頃の、天までつながってるんやないか、て思うほどやないけどな。それでも先っほ見ようとすると首が痛^{いた}なるわ。

そんで、上の方見上げてたらええ匂いがしてくる。ええ匂いのモトには、この世界の兄弟——ウエスターはんがあるんやけど

「ま、ええか。わいの用は高いところでもドーナツ屋でもないわ」

見上げてた首を元に戻して、わいは塔の隅にあるちいぢやな扉にフロシキ押し込みながら、下の方に降りてったんや。

^{三本}細い通路を大きなフロシキ押しながらしばらく歩いとると、押ししてる手えがいきなり重くなったわ。

つきあたりやな？

さあて、少し下がってえ

「せえ、のお そりゃあっ！」

思いっきり体当たりしてやんと、ポンっちゅっ音と一緒にわいは部屋に飛び出したった。

天井めっちゃ高いから、ほんまはえらい広いんやるけど、なんやごちゃっとして狭^{せま}つく^{せま}るしい部屋や。

「おーい、来ましたで〜」

階段4つとドア7つ。ほんまは全部にせきゆりてい、ちゆうのがあるらしいなあ。でも、わいだけが通れる道なら、扉ひとつだけや。服は汚れるし体も痛いけど、ま、わるい気分やないなあ。

「やあ、フェレット」

て、せっかくの気分こわすお人やなあ、まったく。

「フェレットやないわ、サウラーはん！ かわいいかわいい妖精さんの、タルトや!!」

5 おっきなとうのふかいそこ

「しっかしまあ、あいかわらず大変そうやなあ」

「なんやバカでつかいテレビがぎょうさん並んでる前に座ってるサウラーはん、手えは力チャカチャポタン叩きまくっとな。なんど見ても、思わずあきてまうわ。」

「今までのしくみを全部なおすんだからな。このくらは必要さ」

「そう言いながら、やつば手え止めへんなあ。しくみ、て あー、なるほど。」

「テレビに映ってるもんよお見たら、畑たがやしたり、魚とったりする道具や。」

「みんな、いままでなかつたんか」

「そうさ。必要なものはみんなメビウスが与えていた。十分とは言えないが なにも考えなくても、生きていくことだけはできたんだ。それが、なくなつたわけだからな」

「ああ、そないな人がいきなりぎょうさん増えたんやもんなあ。そら、大変や。」

「せやけど、あんさんが一人でやらんでもええやんか。兄弟 ウェスターはんがおるやる？」

「わいがそう言うたら、サウラーはん、やつとポタン叩くのやめて、こつち向いたつた。」

「確かに僕たちは3人も裏方ができる。 が、本当のバカは、表舞台でみんなを引っ張っていく方が似合ってるわ」

「バカで、ひどいなあ。せやけどまあ、裏方言うことならわからんこともないかあ。」

「パッションはんが、裏方とは思えへんしなあ」

「当然だな。だから、ふたりで表に行けばいいと思つてたんだが」

「あかんのか？」

「さすがに、神様にされてしまつてはなあ」

「息ついて、肩落としたつたサウラーはんの姿見て、わいは思い出したわ。」

——あれはメビウス倒して、平和になつた思て初めて遊びに来たときや。パツションはん、何百いう人か拜まれまくつて、歩くだけで苦勞しつたなあ

こらどうにかせんと、て思てたら、兄弟 かおるはんから頼まれたんやつた。『なんとかしてみるから、サウラーはんはんに本を届けて欲しい』て——

「日本から持つてきてもらつた本と、この塔の資料を突き合わせて、なんとか『大統領』というのを見つけてきたんだが 多分、みんな『神様』の代わりに『大統領』と呼んでいただけだろうな」

思い出して、ちょいぼーつとしとつたわいの頭に、サウラーはんの言葉が流れてきとん。さつきからずっと、苦笑いしながら話してる感じやなあ。

「イスは大統領より、お姫様かもしれないけどな。もと神様のイス姫が率先して働いてるから、とりあえず不満は出なくて済んでる。その間に、なんとかしないと、な」

お姫様かあ。そつえば、そないな本もあつたなあ お、これや。

ちょいと大きくて固い本、わいが両手で持ち上げたら、サウラーはんが不思議そうな顔して、

「絵本？ これも、カオルチャンが選んだのか？」
「んにや、ペリーはんや。娯樂が少ないやろから、言うてたで」

言いながら、ニヤニヤ笑^やてたけどな。きつと真面目なサウラーはんがこれ読んできるとこ想像してたんやろうけど んあ？ なんと、顔が怖なつとる？

「本を運んでることに、ミキは知ってるのか？」
「ちよ、声まで怖いやないか。なんや？」

「せ、せや。かおるはんがお金出して、ペリーはんが買^いつてきてる ああ、もちろんペリーはんには、他の人に話さんとして、て言うてあるで」

やー、なんとか怖い顔のわけ氣づいて助かつたわ。ふう。

「そつが。ミキは約束を守る娘だし、カオルチャン

が知ってるなら、まあいいか」

ほえ。わいはそれ聞いてぼかんとしたもうた。

ペリーはんと仲ええのは知つとるけど、かおるはんのことも信用してるんやなあ、サウラーはんつとつと、話それてもうてるわ。

「なあ、サウラーはん。なんでこないな狭つ苦しいとこおらなあかんのや？ 裏方仕事かて、パッションはんたちと一緒に居てもでき うわつつ!!」

言いかけたとこで、いきなり掴つかまれた思たら、狭いとこに突つ込まれてもうた。

「なんや、なんや一体!？」

ぎゅーつと押し込まれたんは、なんや筒みたいなもんやった。しっぱの方おさえたまんまで動けへんし、なんでやる思つてたら、ドンドン、ちゆう大きな音や。なにか落ちてきたんか、て考えとつたら

「おう、来たぞ」

いきなりよお聞く声が聞こえてきた。

姿なんか見えんでもわかる。ここでの兄弟、ウエスターはんや。

「よあ、兄きょうだ、むぐごがつ!？」

ぐーつとまた押し込まれて、息が苦しなつてまうわ。黙つとれちゆうことかいな、わーつたから押さんといてんか!

「ん？ サウラー、いまそこにタルトくんがいなかったか?」

「タルト? ああ、あの小さいやつか。いや、見えないな」

スツとぼけた声やなあ。かわいい妖精さんはここにおるでー 言わんけどな。

「そうか。おかしいな、オレが聞き間違えるわけがないんだが」

「そういうこともあるだろ。この塔は、妙な音が色々聞こえるからな」

「ところで、何の用だ？」

「うむ。イースがな、おまえが運動不足のようだから、外に連れ出してや　　っと！　これは言っちゃいけないんだった!!」

あゝあ。素直なお人やかなあ、兄弟は。

「ははは　　心遣いには感謝する、と伝えておいてくれ。僕はもう少し、やることがある」

ん？　動いてる感じするなあ。　　あ、いまカツンいうて揺れたわ。筒ごとどっか置いたんやな。いまのうちに、抜け出して、と

「カオルちゃん兄弟のことか？」

「ああ。最後まで、ちゃんとやってやらないとな」

筒から抜けても、まだ目の前暗かった。本のうしろに置いたんやな。ま、しゃあない。影から静かに覗きますかー。

「そこなんだが　　なあ、なんでオレにも全部話してくれないんだ？」

「当たり前だろう。おまえに言えば、イースに伝わる」

「いや、オレは、そんな、こと、は」

「その言い方だけでバレルぞ。　　そついうことだ。まあおまえには、イース相手と違って嘘は言つてないから、それで我慢してくれ

おつとと！　それに触るなよ」

さつきまでサウラーはんがカチャカチャやつとつたとこに、兄弟がよつかかるうとしたとたん、大きな声や。なんやろ？　兄弟も首かしげとるし。

「下手にいじると、大バニツクになるぞ。『大地は割れ、海は逆巻き、強風がすべてをなぎ倒す』」

つて、なんやと!?

「お、脅かすなよ。人が悪いぞ」

「冗談じゃないぞ。気象コントロール装置だからな。もちろん、本来は気候を整えて安定した農業収穫を得るためのものだが　　大きな力は、使い方を間違えると大変だ。お前の腕だって畑を耕すこともできるが、人を殴り倒すこともできるだろう？」

サウラーはん、いまめっちゃマジな顔しとるんや

ろなあ。

わいからは背中しか見えへんけど、それがわかるくらい兄弟がビビつとるんやから

兄弟が部屋出てつてから、わいはテレビの前まで出てきたつた。ボタンさわらんように、よけてよけて、と。よつしや。

「やあー、えらいもんなんやなあ、こいつ」

「聞いてたか。まあ、聞こえるよな」

しばらく兄弟の出つた扉見てたサウラーはんが、振り向いて言つたわ。なるほどなあ、

「せやから、あんさんはここに居るんかあ」

言つたら大きくうなずいてくれた。

「ここは、誰にも明け渡しちやいけない。ウェスターにも、イースにも、だ。」

そして、ゆっくり元に戻していくんだ。夏も冬も

あつた世界に。人が文化を創り出せる世界にね」

せやけど、

「おーお、カッコええなあ〜」

「茶化すなよ、フェレット」

わいがわざと声軽うして言つたら、また苦笑いで応えとるわ。やれやれや。

「カッコつける奴つちや、信用でけへんもんや。せやからあんさんとは、兄弟になれへんねん」

「かも、な」

いや、ちやう。わいが兄弟にならへんのやなくて、この人が兄弟作らへんのや。わあつとる、けどな

「なあサウラーはん。なんで、わいが来たことまで、兄弟に隠すんや？」

「黙つていてほしいんだよ。あいつにも」

「黙る、て？」

「僕がどんな本を、ミキの世界から持ってきているかをき。あいつはわからなくても、イースが感づくかもしれないからな　つと、いかなな」

「へ？ うわわわっ！」

さつきよりそつとやけど、やつぱ掴まれた思たら目の前がなんかでぶさがった。本、かあ？

「またしばらく静かにしててくれ。すぐ済むから」

「コン コン」

「エテラか？」

「サウラーはんがそう言うてから、わいは扉たたく音に気づいたわ。」

「なんや、おとなしいノックやなあ。わいだけやったら、まるつきり気づかへんな。」

「あの サウラーさま？」

「入っていいぞ、エテラ」

本の影からこつそり覗いたら、カチャン、て、またちいぢやな音で扉あけて、入ってきたんは女の子やった。

背えは高いんやけど、うすーい青の色したつなぎ服——ピーチはんとこでは、ワンピースいうたか？ それ着てゆつくり歩いてくるの見てると、まるでちいぢやない子供みたいや。

着てる服の色のせいやるか、なんやまるごと青、ちゆう感じやな。

あれれ？ どことなく、だれかに似てる気がするなあ。誰やったつけ？

「はい あの、どなたかいらっしやっていたのですか？ お声が聞こえましたけど」

「ああ、ただのひとりごとだ。気にするな」

「耳のええ子やなあ。なるほど、こらサウラーはんが神経質になるはずや。」

「そう ですか。あの、お食事です。本当は、イスさまと一緒に食堂で召し上がっていただきたいのですが」

「イスがそう言ったのか？ 彼女にも気にするな、と伝えてくれ」

食事のトレイ受け取って、サウラーはん、すぐ女の子に背中向けた。さっきのはなし聞いたあとやと、その気持ちもわかるけど、

「私も、心配なんです」

ぼつん、て消えかけた声で言つてんの聞こえろと、なんや切ななつてくるなあ

「なんやなんや、いまの娘むすめおは？ サウラーはん、隅すみに置けまへんなあ。うりうり」

女の子の足音が消えたん確かめて、わいはわざと明るう言つたつた。

「茶化すなと言つたぞ。彼女は、僕の世話係だ。実に真面目で有能だから、できればイースについてやつて欲しいんだけどなあ」

「多分、サウラーはんやないとあかんのやるな」

「おいおい。彼女に悪いぞ、そんな言い方は。それより」

「それより、なんや？」

「ピーチくんたちの方は、変わりないのかい？」
ぶふつ。

あかん、話の変え方が無理やりすぎて、思わず大笑いするとこやつたわ。まあ、それなりに気持ちはわかつとるんやつたら、意地悪せんでもええか。

ええと、なんやつたつけ？ ああ、ピーチはんたちか

「ぶつーに学生してんで。パッションはんが忙しゅうなつて、1ヶ月に1回しか行かへんから、待ち遠し思うてるみたいやけどなあ」

「そうか もう少し、頻ひんぱん繁はんに会えるようにしてやらないとな」

ん？ そんなことできるんか？

「そのために、今は忙しいのを我慢してもらつてるんだよ。本人はこれがずっと続くと思つてるのかも

しれないけどな」

「ちゃんと語つたらええんに」

「残念だけど、あいつが気づいた時点でこの計画はおじゃんだ」

おジャン　？　なんや、それ??

わいが首かしげとつたら、サウラーはんが笑わろて言つた。

「ああ、そうか。これはスラングなんだな　以前ミキに貰った本に書いてあった。要するに、失敗つてことだよ」

「ふーん?」

ピーチはんのことはプリキュアの名前で呼ぶんに、ペリーはんだけはほんとの名前で呼ぶんやなあん?　なんや、引つかかつとんで、なんやつたる?」

「そういえば　ミキも変わりないのかな?」

ミキ　ああ、そうや!」

「ペリーはんや!　思い出したわ」

「べ　ミキが、どうかしたのか?」

「さっきのエテなんかはん、誰かに似てる思たんや。ペリーはんをすつつつごお大人おとなしたら、そつくりやんか!」

せや。なんで気づかんかったのやる。背えも顔の感じもあない似てるんになあ。あれやつたら、ペリーはん思い出すのもわかるわあ。

「で?」

「せやから、あ」

な、なんや、この冷たい目線。顔は普通なのに、さつきより怖い気がするんで!?

「あ、あー　なんでもないわ。忘れたつてえな」

「ちよつとサウラー!　また籠こもつてるんでしょ!!」
 パタパタいう靴の音がしたんで、わいがまた本の影に飛び込んだ瞬間、ばんつ、と扉が開く音と一緒に声が入ってきたわ。

サウラーはんの冷たい目えから逃げたかったところから、ちようどええけど、

「あら？」

しもたなあ、ちよい逃げるの遅かったかあ？

「いまの タルトに似てなかつた？」

そーつと、目玉まで本の上に出して覗いたら、サウラーはんの背中の向こうにパッションはんや。

「 見間違いいね。こんなところにいるわけないもの。ラブのところならともかく」

「この世界にもフェレットが住んでるよつだから、なんだつたら一匹ペットにでもするか？」

パッションはんが見えなくなつた。サウラーはんが横にずれて、わいを隠してるんやな。

「いいわよ。そこまでホームシックじゃありません」

「ホームシック、か」

またや。苦笑いしながら話すん、サウラーはんクセになつとるんちゃうやろか。

「な、なによ。もつ、くだらないこと言つてないで。

エテラに聞いたわ、もつ10日も外に出てないって。少しは動かないと、運動不足になるわよ？」

「たまに塔の中を走つてるよ。お前も、ウエスターと一緒に走つたらどうだ。」

もつとも、外で一緒に走つて、みんなの微笑ましい視線を浴びたいなら別だが ぶっ！

おわっ！ サウラーはんがこつち倒れてきた!?

「ひとをからかう余裕があるなら、もつちよつとこつち手伝いなさい！ その気になつたら、上で待つてるわよ。いいわね!!」

「からかう余裕、ね」

思いつきり扉閉める音が響いて、バタバタいう足の音がなくなつてから、サウラーはんが言つた。また、例の苦笑いつきや。あんま、聞きたないなあせや。

わいは本の影から飛び出して、妖精さん用の扉の前に行った。

転がってるちいぢやなふくろをくわえて、そのままサウラーはんの手の上にジャンプや。

「まあ、いろいろあるやろうけどな。かおるはん兄弟のドーナツでも食べて、元氣出しや」

これならええやろ。これで元氣出せへんヤツはおらんから

「このドーナツも、問題なんだよな」

あん？効かんやて!?

「小麦粉 その原料の、小麦。メビウスの資料を調べてわかつたんだが、ラビリンスにはそれが無いんだ。正確に言つと、もともとはあつたんだが、より栄養価の高い作物に植え替えられてしまつて、いまでは絶滅している」

わいがびっくりしてたら、サウラーはんが半分ひとりごとみたいにしゃべつとるわ。

んー、小麦がない？ちゆうごとは

「ウェスターのドーナツは、ラビリンス製にはできない、つてことだな」

ドーナツが作れへん、て。

「んな、殺生せうじょうな」

「カオルちゃんとも相談しているが、ラビリンスの原生植物に影響が出たら責任をとれない、とかで小麦を送つてくれないんだ。なにか悪いことでもあつたら、僕のせいにするばいいのにな」

そう言つ言葉も、やつは苦笑いの向こう側や。やれやれ、思うて上を見上げたら、

「はあ。えらい深いなあ、ここは」

わいは思わず、ため息つきながら言つてしもた。

入つてきたときも高い思うたけど、いまはずうつと、天井が見えんほど高い気がする。この部屋。

「そうかな？扉は多いが、階数で言えばせいぜい地下3階のはずだぞ」

そついう意味やない と言つても、わからんの

やるな。このガンコ^{サウラー}もんには。

「さあて、また重い重い本背^{しよ}負^つって、底にもぐらにや
なあ」

何日かたつてから、ベリーはんに本もろて、わい
はまた公園の隅^{すみ}っこに穴開^あけとつた。

イヤなわけやないけど、なんやため息出てくるわ。

ま、しゃあない、か。

「たー、る、と?」

びくうつつ!!

な、な、な、なんや!? て、振り向いたら パイ

ンはん??

「おつきい荷物だね。大丈夫?」

「あー、いや、その、あんな、これは、これはな」

あ、あれ? ふふふ、て笑^{わら}てん?

「いいのよ。サウラーさんのお使いでしょ? わけは

聞かないから、がんばって、ね」

「あ、え ええんか?」

「うん。でも、ひとつだけ」

ひとつ? なんやる思^{おも}てたら、笑いながら、手がわ
いの前^{まへ}に出てきた。

「はい、これ。わたしから」

手の上に、可愛^からしい花柄^{はながら}のふくろがひとつ。な
んや、これ んな!?

ふくろ開^あけて出てきたん、む、麦^{むぎ}やないか !!

「パ、パインはん、これ ?」

「かおるちゃんには、ないしよ。ね?」

しーつ、て指^さいっばん顔^{かほ}の前^{まへ}に出^でて言^いつてる。ちゅ

うことは、本も麦^{むぎ}も、パインはんは知^しつとるんか

せやけど、

「ええんかいな」

「いいのよ。ともだちの国^{くに}を助^{たす}けるんだもの、当^{あた}

り前^{まへ}でしょ?」

そら、そうやるけど

わいの目えが、パインはんとふくろの間、勝手に
行ったり来たりしとつたら、パインはんの顔がわい
に近づいてきて、

「ラブちゃん風に言えばね 『みんなでしあわせ、
ゲット』だよ♡」

「 さよか」

片目つぶつてそう言われると、それでええ気がするわ。

「一応ね、お父さんにそれとなく訊いて、影響の
少ない品種を教えてもらってるの。それでもなにか
あったら、わたしも共犯。ね」

それじゃ、サウラーさんによろしく。行ってらっ
しーい」

手え振りながら、兄弟のドーナツ屋台に走ってく
パインはんの後ろ姿見てたら、ため息やない息がひ
とつ出てきたわ。なんや、かあるはんがもつひとり、
増えたみたいやなあ。

「わいらだけやなくて、みんなでゲット、か」
大きなフロシキの上に、もひとつふくろが乗っかっ
たけども、かえって少おし軽くなった気がするで。
よっしや！

「ほな、がんばって行きますかい。ふかあいふかい
底へなあ」

—おしまい—